

2026 Autumn

母校通信

158号

"Mastery for Service"

〔巻頭企画〕

ままならない人生を
あなたはどうか
歩いていきますか？



関西学院同窓会

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155

TEL: 0798-51-3604 URL: <https://www.kwangaku-alumni.jp/>

ままならない人生を あなたはどう歩いていきますか？

人生は、思い描いた通りには進みません。病気や介護、子育て、仕事……。

予期せぬ出来事によって戸惑いや苦しみを抱えることがあります。

そんな時、私たちは何を支えに歩いていけばよいのでしょうか。

今回の特集では、人生の転機に直面した卒業生らの歩みと、
死生学の視点から生きることを見つめます。

PART 1

ままならない人生を生きる
卒業生ら3人の歩みを紹介します。



かげやま あいこ
景山 愛子 さん

1998年商学部卒業。2000年大学院商学研究科修了。広島国際大学健康科学部医療経営学科講師。関学大学院商学研究科修了、広島大学院教育研究科修了、独立行政法人日本学術振興会特別研究員、安田女子大学現代ビジネス学部特任講師、専業主婦を経て、2020年から現職。専門は管理会計。関西学院評議員も務める。18歳、12歳、10歳の三児の母。

自分の「ベスト」は変わっていい

「人生はなかなか思い通りにならないものだと感じます」。そう振り返る景山さんは、3人の出産・子育て、別れ、仕事など、研究を中断せざるを得ない状況を幾度も経験してきました。それでも今は、長年の夢だった大学教員となり、医療経営分野で管理会計の研究に取り組んでいます。その歩みの中でたどり着いたのは、「自分の『ベスト』は変わっていい」という、気づきでした。

今の私、なんて生産性が低いのだろう…

大学教員を目指していた景山さん。しかし、関学大学院修了後、希望するポストはなく、地元・広島で会計事務所勤務した。結婚後は博士号取得を目指し、再び広島大学院へ進学。ところが、3人の出産・

育児、仕事との両立、家族の分裂、さらに子どもたちの発達特性に伴う悩みやトラブル……。予想していなかった出来事が次々と重なり、専業主婦として身動きが取れない時期もあった。

結局、大学院は、休学と復学を繰り返し9年間在籍した末に、満期退学。論文も思うように書けず、子どもにも十分に向き合えなかった。「今の私、なんて生産性が低いのだろう……」。自分を責める気持ちは年々強くなっていった。

その時の私に合わせてベストを変えていい

ある夜、子どもを寝かしつけた後、散らかった部屋で文献が山積みになった机を眺めていた。その時、ふと思った。研究にだけ打ち込めた20代の頃の私と家庭を抱えた30代の私。年齢も体力も環境も違うのに、

同じ基準で比べ続けること自体が無理だったのではないか。昔の理想に自分自身が縛られているのではないか。

「すぐに考えを変えられたわけではありません。でも、40歳を過ぎた頃から『今の私なりにベスト（最善）は尽くした』と思うようになったんです」。背伸びをせず、等身大の自分に、「よくやった!」と花丸をつけるような感覚だった。

しんどいと感じる時は「もしかしたら、今の自分に合わないベストを目指しているのかもしれない」と考え、思い切つて目標を下げる。子どものためにも家を整えたいけど時間も体力も足りないで、台所だけきいにできたら、自分を褒める。本を二冊読みたいけど、一章読めたらOK。そんな感じでした。でも、不思議なことに、「できなかったこと」ではなく、「できたこと」が見えるようになったという。すると、過去の自分のことも、「あの頃も私なりに頑張っていたんだ

なと肯定できるようになりました」。

以来、景山さんは、「自分のベストは変わっていい」と考える。それは自分に甘くなることではなく、今の自分を大切にすることなのだ。

どんな時も研究の世界とつながり続けた

広島国際大学に正規雇用されたのは、40代半ばだった。経済的自立も目指していたので、「ようやくスタートラインに立てた」という思いでした。

専業主婦も含め、パートや大学院生の期間が長く大学教員になれる保証はなかった。それでも、自ら可能性ゼロと決めつけることはせず、論文の共著や学会事務局の手伝いなど、その時できる形で研究の世界との関わりだけは持ち続けていたという。「諦めが悪いのかもしれませんが、その時でさないからといって、一生できないわけではないと思っています」。

三十年越しのチャレンジ

現在は、公立病院が担っている地域への貢献を会計学の視点から可視化する研究に取り組む景山さん。最近はずいぶん登校に付き添う時間も増え、思うように研究時間を確保できない日も少なくない。それでも、以前のような生産性の低さを感じることはない。「実は今、また大学院に通って三十年越しとなる博士号取得に向けてチャレンジしているんです。今回も時間はかかりそうですが、それも今の私。周囲の力も借りながら、今のベストを尽くしたいと思っています」。

わたしの人生と向き合う視点

人と小さな関わりを持つ

専業主婦だった頃、社会から切り離されたような孤独を感じるがあった。そんな時、ママ友から誘われて、小学校のPTA活動に参加。先生や保護者と学校行事などの企画や運営に携わる中で、「私にもできることがある」と思えるようになったという。「特別なことじゃなくていいんです」。買い物先で店員さんと言葉を交わしたり、エレベーターで「お先にどうぞ」としたり。小さな関わりで、自分が笑顔になれ、自分の居場所や社会とのつながりを感じられるようになったという。

諦めない。でも執着はしない

「留学したいのに、今の私にはできない……」。やりたいと思っても今すぐには叶えられないことがたくさんある。そんな時、景山さんは無理に諦めることはしない。そと、「頭の片隅に」留め置いておく。大切なのは、いつか叶えられるとポジティブに記憶すること。「自分の願いからつかず離れずにいると、自然と関連情報も入ってきて、『今ならでき』というタイミングが訪れるんです」。諦めない。でも執着はしない。それが景山さん流の人生の作り方だ。



いのうえ まさひと
井上 昌彦 さん

関西学院同窓会特別会員。研修講師。小さい頃から本とコンピューターが大好きで図書館の世界へ。図書館情報大卒業後、関西学院で図書館員として約30年勤務。現在は図書館員向け研修講師として独立準備を進める。ポジティブ心理学実践インストラクター、ほめる達人1級。

情報は人を支える、人をつなぐ

一歩踏み出す決意

「1年後も元気がどうかわからない」。そう語る井上昌彦さんは約30年勤めた図書館員をやめ、55歳で「図書館員向けのコミュニケーション研修講師」という新たな一歩を踏み出そうとしています。その決断の背景には、14年前に病で亡くした長女・玲子さんの存在がありました。井上さんを支えてきたのは、人とのつながりであり、言葉であり、情報でした。

図書館員向けにコミュニケーションやチームづくりを教えるという研修講師は、まだほとんどいない。「思い切った決断ですね」と驚かれることも多い。それでも井上さんは、「この道に進むことを決めた。きっかけは、長年図書館で働く中で感じ続けてきた一つの課題だった。『図書館員つ





て、専門知識を学ぶ機会
は多くても、人との関わり
方やチームづくりを学ぶ
機会ほとんどない
です」。図書館員自身が
もつと幸せに働き、お互い
を支え合えるようになれ
ば、その先にいる利用者や
も、もつと良いサービスや
情報を届けられるはず。
図書館という場所がもつ
と世の中を幸せにできる
ようになる。もと
もと、人と人との関係性
に興味があり、自身で
アサティブコミュニケーション
や心理的安全性、ポジティブ
心理学などを学び続け
てきた井上さん。その学
びを図書館業界に還元
したいと考えるようになった。

「やれたらいいな」。最初は
そう思っていただけだ
った。でも、井上さんは、
人生がある日突然変わ
ってしまうことを知っ
ていた。だから、決めた。
「二歩踏み出してみよう」
※自己主張しつつ相手を尊重する対等な「ミニケーション」

玲子さんが教えてくれたこと

長女の玲子さんが、頭痛を訴えたのは小学5年生のときだった。診断は10万人に2人という脳腫瘍。家族は懸命に支えた。しかし、病は進行し、玲子さんは闘病約1年で旅立ってしまう。井上さんは「別れを乗り越えたとは思えません。今も不条理感でいっぱいです」と絞りだす。「なぜ玲子だったのか。その問いに答えはない。今も、玲子さんのことを話すときは言葉に詰まり、楽しそうに歩く親子を見ると胸が締め付けられそうになることがある。でも、玲子さんは井上さんにたくさん

ことを教えてくれた。今日という日があること。元気に過ごせること。大切な人と笑い合えること。それらは決して当たり前でない。だからこそ、会いたい人には会おう。やりたいことは先延ばしにしない。

進まないといけないから言葉にして前を向く

闘病中、井上さんは個人ブログに玲子さんのことを書いていた。病氣のこと、不安や怒り、無力感。面と向かつては話せない思い

「れいこパーティー！」でつながる縁

毎年、玲子さんの命日をセカンドバースデーと呼び、「れいこパーティー！」を開く。妻、長男、次女に、闘病中から支えてくれた人たちが集まる。食事をし、笑い、近況を語り合う。「この日を思い出すことは1番つらい。でも下を向いたままではいたくない。どうせ生きるなら、明るく楽しく前を向いて。玲子ならきっとそう思ってくれているはずだから」

わたしの人生と向き合う視点

情報のチカラで世界を幸せにする

井上さんにとって「情報」とは、知識やデータだけではない。励ます言葉、寄り添う気持ち、経験を伝えること。「大丈夫」という一言。誰かを思う気持ちも情報の一つだと考える。玲子さんの闘病を通して、情報の力を何度も実感した井上さんは「情報のチカラで、世界をもっと幸せにする！」を人生のミッションとして掲げている。

井上さんのブログはこちら▶

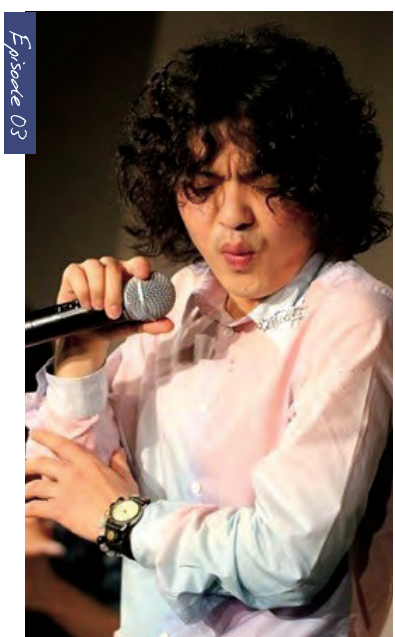


を言葉にすることで、何とか気持ちを整理して自分自身を支えていたという。「前向きだから進めたわけじゃないんです。進まなきゃならなかったから、そうやって必死で前を向こうとしていたんだと思います」

情報が人をつないだ

ブログの記事は思わぬつながりを生んだ。医学雑誌の文献を送ってくれる人。病氣の体験を教えてくれる人。応援しています」と励ましてくれる人。寄せられた二つひとつの情報や言葉が、家族の支えとなった。

今もブログは続いている。図書館のこと、人との出会い、日々の気づき。そして最後に必ず「れいこ」と題して、娘への思いを綴る。周りには玲子のことを知らない人も増え、彼女の話を話す機会もありませ



ぎま たくみ
儀間 太久実 さん

2012年総合政策学部卒業。口笛演奏者。学生時代に口笛世界大会で日本人初の優勝を果たし、これまで3度、世界一の実績を持つ。大学卒業後から、プロの口笛奏者として活動を始め、現在はレッスンやYouTubeでも口笛の魅力を発信。ダンスや手話、小道具を取り入れた演奏スタイルが多くの感動を呼んでいる。

「好き」をもう一度好きになるまで

「好きなことを仕事にできたら、楽しいだろう」と思っていました。大学時代に出場した口笛世界大会で優勝し、一躍注目

を集めた儀間さん。「口笛で生きていく」と決意し、プロの道へ進みます。しかし、思い描いていた未来は待っていませんでした。努

力するほど、好きだったはずの口笛が苦しくなっていたのです。遠回りの末に儀間さんがたどり着いたのは、「何のために口笛を吹くのか」という、自分自身への問いでした。

「絶対に成功してやる」

大学時代、好きだった口笛で世界一になった。思いもよらない肩書きを手に入れた。メディアからも注目され、「口笛で食べていけるかもしれない」と思った。一方で、「口笛でプロなんて無理だ」。そんな言葉も浴びた。「だったら絶対に成功してやる」。負けず嫌いだった儀間さんは、その一心でプロの世界へ飛び込んだ。

努力するほど苦しくなった

ところが現実はその甘くはなかった。プロとして活動する中で出会ったのは、一



流の音楽演奏家たち。技術も表現力も、自分よりはるかに上だった。自分は音楽教育を受けたわけでもなく、独学のたたき上げ。勢いや情熱はあったが技術に粗さがあり、音楽的知識にも乏しかった。もつと練習しなければ。もつと欠点をなくさなければ。もつとうまくならなければ。努力すればするほど、口笛は慎重になり、自由さを失っていく。共演した演奏家から厳しい叱責を受け、SNSでは誹謗中傷にもあった。でも、相談する口笛の師匠もいなかった。演奏の依頼はあったが、大好きだった口笛は「仕事の道具」になり、義務になっていた。

「うまいね」よりも「楽しかった」へ

3、4年だったろうか。口笛を吹くのが苦痛でたまらない時期が続いた。「もう限界だ。やめよう」。そう思ったら、涙が止まらなくなった。口笛に夢中になったのは小学4年生のとき。口笛がきっかけで友達が

できた。大会ではたくさんの人と出会った。口笛があつたからこそ、見られた景色がたくさんあった。泣きながら気づいた。世界一になったきっかけでも、プロとして成功しなかったわけでもない。「僕はただ口笛が好きで、口笛でこんなにすごいんだよ、面白いんだよってみんなに知ってほしかったんです。それができるのは、きつと僕だけなんです」

くして感動してくれる姿をみたら、「ああ、これが自分が夢見ていた場所や」。そう素直に思えるという。「目の前の人にどうしたら楽しんでもくれるか。そのために口笛を吹いていた。今はそんな思いでいます」

「夢の舞台」は目の前にあった

以前から、口笛にダンスや手話、小道具を組み合わせたら、もつとみんなが楽しめると考えていた。MCにも力を入れ、「うまいね」「さすがだね」よりも「楽しかった」「元気をもらった」。そんなふうに喜んでもらえる演奏を目指そう。とにかく自分が大好きな口笛で多くの人に感動してもらおう。そうして、現在のエンタメ性の高い舞台スタイルが生まれていった。

勝を逃し、二位となった。以前なら、その結果に納得せず、もつと技術を磨こうと思っただろう。でも今回は違った。「勢いや選曲、アレンジが僕の強み。負けたことで改めて実感できた」

今年6月にあった世界大会。初めて優勝を逃し、二位となった。以前なら、その結果に納得せず、もつと技術を磨こうと思っただろう。でも今回は違った。「勢いや選曲、アレンジが僕の強み。負けたことで改めて実感できた」

わたしの人生と向き合う視点

苦手こそチャンス

いまや、儀間さんの代名詞といえる「ダンス口笛」。もともとダンスは大きな苦手だった。でも「口笛と組み合わせたら絶対にお客さんに喜んでもらえる」とダンス教室へ。ゼロから学んで苦戦しながらも、兵庫県立芸術文化センターで二千人を前に初披露。会場は大きく沸いた。「ダンスを選んできたけど本当はずっと気になっていたのかも。今は苦手と思っていることほど、実は自分の強みが隠れているのじゃないかって思っています」

儀間さんの次回コンサートは10月12日(月・祝) サンスクエアホール(堺)にて。 口笛演奏の様子はこちら▶



ままならない人生を考える

藤井美和教授に「死生学」の視点から伺いました。

人生は私たちに 問いを投げかける

誰にでも起こる予期せぬ出来事

「どうしてこんなことが起きるの」「なぜ私が」。予期せぬ病気や事故、キャリアの充実に重なる子育てや介護。人生の優先順位を変えざるを得なくなった時、自分の存在意義や生きる意味を見失いそうになるかもしれません。これは多くの人が経験することです。私が専門とする死生学は、死を見つめながら「どう生きるか」を考える学問です。死生学では、こうした出来事を、「人生からの問い」と捉えています。

人生は選択の連続です。私たちは何を選ぶべきか、常に自分の「モノサシ」で判断しています。でもその判断基準は、本当に自分のものなのでしょうか。「勉強や仕事はできた方がいい」「役に立つ人間でなければ」「評価されることが大切」。そういった社会の価値観を自分のものだと思いついてはいないでしょうか。だから人生は私たちに問うてきます。「あなたはどうか生きていますか」と。

私自身に向けられた問いとその先にある「ほんもの」

二十代の頃、私は新たに創刊する情報紙の副編集長として夜中まで働いていました。忙しい日々でしたが、好きな仕事ができる充実感で満たされていました。ところが突然難病を発症し、わずか三日間で全身麻痺に陥ったのです。指一本すら動かさず瞬きもできない、息ができなくなっていく状態の私に、主治医は「こんなことでもするから、今晚だけは頑張らなさい」と告げました。その時、私の心突き上げてきたのは、「何のために生きてきたのか」という強い後悔でした。仕事、社会的評価、経済的豊かさ。それらは何一つ死の淵に立つ私を支えてはくれませんでした。

でも、すべてを手放さざるを得ない状況になった時、初めて見える世界があります。私はその世界こそが「ほんもの」だと考えています。

「何ができるか」ではなく
「存在そのものに価値がある」

「何もできない自分に生きる意味があるのだろうか」。あまりの苦しみに涙があふれるばかりでしたが、私はある時から「生きていい」と思えるようになりました。

入院中の出来事です。ある日、同室の患者さんが車椅子で私のベッドサイドに来て、手鏡をかざしてくれました。そこには、窓の外に広がる青い海と、神戸港にゆつくり入ってくるフェリー「さんふらわあ」が映っていました。毎朝その時間になると、患者さんたちは華やかな太陽のマークが描かれたそのフェリーを眺めるのを楽しみにしていた。

ました。その方は、少し体を動かすだけで骨折してしまうほどの末期状態であるにも関わらず、私に手鏡でその景色を届けてくれたのです。そしてフェリーが神戸港に入ると、嬉しそうに自分のベッドへと戻って行きました。これは私にとって生涯忘れることのない出来事となりました。

ある看護師さんは、私の血圧を測り終えた後もずっと横に立っていました。どうしたのかなと思つて目を向けると、「藤井さん、つらいね」と泣いておられたのです。また母は、毎日欠かさずニコニコと救急病棟に来ては、管に繋がれ寝たきりの私にいつも通り接してくれました。

誰一人、「頑張つて」「早く元気になつて」とは言いませんでした。ただありのままの私を受け入れ、共に喜び、泣いてくれた。その愛に触れた時、私は初めて「このままで生きていいんだ」と思えたのです。人は何かできるから価値があるのではない。「存在する」ことが先だったのです。

寄り添うということ

寄り添いは、苦しむ人に何かすることやアドバイスすることではありません。むしろその逆。「あなたは苦しむ人を無条件に愛することができるとか」と問われることなのです。その時、私たちは気づきます。自分の中に「できることに価値がある」というモノサシがあることを。

苦しむ人も寄り添おうとする人も、この価値観に苦しみます。それでもこのモノサシを手放すことは難しい。これは人間の「限界」ともいえるでしょう。しかし一方で、苦しむ人も寄り添う人も、互いに限界ある存在だという点において、「助ける―助けられる」という関係性から、「互いに支え合う」関係性へと変えられるのです。支えていると

思つても支えられ、支えられているように見えて実は大きな支えになっている。それが人間関係の本質だと思います。

「モノサシ」から自由になる

では、「限界」にどう向き合えばよいのでしょうか。

死生学は、神や自然、人間を超える大いなるものとの関係性に目を向けます。これらは、同窓生の皆さんが関西学院の学びの中で、折々に触れてきたものでもあります。

たとえば、愛する人を亡くした時、その人のいない生活を受け入れることだけが悲しみとの向き合い方ではありません。死生学では、目には見えなくても、その人との新たな関係を結び直していくという視点を大切にしています。

人生の困難に向き合うときも同じです。苦しみを無理に乗り越えようとすると、かえって苦しくなることがあります。むしろ立ち止まり、自らを手放すことで、人は自分の限界に気づき、生産性や効率性のモノサシから自由になることもあります。そして「ただ在る」自分に気づいた時、人は新しい世界観を持つことができるのです。

限界を認め、「問い」に向き合い続ける

「何を大切に生きるのか」。人生は何度も私たちに問いかけてくるでしょう。

人は無力な存在です。人生を思い通りにコントロールすることはできません。その究極が「死」です。死生学が「死」を「最後の成長の機会」と捉えるのは、この世のすべてを手放していく「死」においてこそ、「本当に大切なものは何か」という根源的な問いが立ち現れるからです。自らの限界を認めつつ、この問いに向き合い続ける。その歩みが生きることなのではないでしょうか。

藤井 美和
人間福祉学部教授



20代で難病を患ったことをきっかけに、新聞社を辞め、死を含めて生きることを研究する「死生学」の道へ。日本の死生学教育を牽引し、2025年、日本人で初めて死生学の国際学会ADECの「Academic Educator Award」を受賞。

準硬式野球部

寺地準硬の初陣は伝統の
関関戦を制し最高の船出



寺地悠太郎主将(文3)は「元気で楽しく、応援したいと思ってもらえる雰囲気をつくりたい」と新チームへの思いを語る。最高のスタートを切った寺地準硬。今後の活躍から目が離せない。

新体制での初陣となった伝統の関関戦。前半は両者譲らぬ投手戦となるも、6回に渡邊(社3)の適時二塁打で試合の均衡を破る。継投陣もリードを守り切り、3-1で今年も見事関大を制した。寺地悠太郎主将(文3)は「元気で楽しく、応援したいと思ってもらえる雰囲気をつくりたい」と新チームへの思いを語る。最高のスタートを切った寺地準硬。今後の活躍から目が離せない。



スキー競技部

今年も長野県の野沢温泉村スキー場で迎えた、関関戦の初戦。関西インカレと兼ねて行われ、アルペン、クロスカントリー競技で男女ともに好成績を残す。結果は110-79と見事快勝を収めた。男子大回転競技にて3位に輝いた国本空良(商3)は「荒れたコースを走り切り、勝つことができてうれしい」と振り返る。悪天候の中全員が雪上で輝きを放ち、関学に価値ある初白星をもたらした。



今年も関関戦の
初戦を白星で飾った！

水上競技部競泳パート

関大を圧倒し、夏に向けて好発進



昨年に引き続き、全員で勝利をつかんだ。「チーム一丸となって挑み、勝つことができてうれしい」と丸山碧斗主将(法4)は笑顔で振り返る。今大会で特段存在感を発揮したのは舟橋(商1)。1年生ながら6レースに出場し、それぞれで好成績を残した。多くの種目で上位を独占し、圧倒的な強さを見せた関学。この夏、彼らはさらにパワーアップした姿を見せてくれるだろう。



拳法部

宿敵関大との接戦を制し
悲願の雪辱を果たす



昨年の雪辱を果たすべく臨んだ第49回総合関関戦。女子は惜しくも敗北を喫したが、男子は4-3で接戦を制し、連敗記録に終止符を打つ。勝敗が決するまで目が離せない熱戦に、会場は歓声に包まれた。木下星七主将(経4)は「リベンジができて本当に良かった」と笑顔を見せる。チーム一丸となってつかみ取った悲願の白星。勢いに乗る拳法部のさらなる活躍に刮目(かつもく)せよ。



アメリカンフットボール部

伝統の一戦で強さを
見せつけ関大を圧倒



今年も宿敵を退け、勝利をつかみ取った。第49回総合関関戦にて関大を31-10で下す。アウェイでの開催となったが、多くの観客が声援を送った。上級生だけでなく、下級生も躍動し存在感を発揮する。快勝を収めたものの、#41 LB倉田雅琉主将(商4)は「自分たちのやりたいアメリカンフットボールはできていない」と現状に満足せず課題を口にした。勝利の先を見据え、さらなる高みを目指す。



第49回 総合関関戦

KAISERS × KWANSEI

総合関関戦は1978年から続く関大体育会とのスポーツ対抗戦だ。昨年は25勝10敗3分で2連覇を達成。今年度は『轍』をスローガンとして掲げ、関西大学で開催。最終結果は17勝19敗1分で終えた。今回は数ある試合の中でも劇的に勝利を収めた6部活を紹介する。

ゴルフ部

接戦を制し3年
連続で白星を飾る

接戦を制し、3年連続勝利を飾った。マッチプレー形式で行われ、男女混合で5組のペアが出場。前半終了時点で2勝3分と先の読めない展開に持ち込まれる。競り合いを2組が勝ち抜き、見事白星を飾った。「プレイヤーだけでなく、応援やキャディーみんなの頑張りの結果」と高山寿輝主将(国4)は振り返る。連勝記録を途切れさせず、来年へのバトンをつないでみせた。



スローガン『轍』

轍

第49回総合関関戦のスローガンである轍(わだち)には「長い歴史の中で培われてきた定期戦において、自分たちらしい色を出しながら新たな足跡を刻んでいきたい」という思いが込められている。両校が戦いを通して、新たな「轍」を刻むことができるよう、このスローガンを選定した。

部活動名	前哨戦										本戦										第49回総合関関戦戦績
	2/27 3/3	3/24 4/4	4/26 5/4	5/9 5/10	5/17	5/23 5/24	5/30	6/6 6/7	6/6 6/13	6/6	6/7	6/11	6/13	6/13	6/14	6/14	6/14	6/14	6/14	6/14	
スキー競技部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	17
陸上競技部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	19
水泳競技部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
ラグビー部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
馬術部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
航空部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
ボート部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
相撲部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
アイスホッケー部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
卓球部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
硬式野球部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
ソフトテニス部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
バレーボール部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
フェンシング部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
陸上ホッケー部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
スケート部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
ワンダーフォーゲル部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
ゴルフ部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
バスケットボール部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
射撃部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
重量挙げ部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
剣道部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
ラクロス部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
合気道部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
体操部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
空手道部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
準硬式野球部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
アメリカンフットボール部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
ハンドボール部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
自動車部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

※ラクロス部男女はエキシビジョンマッチのため、勝敗には含まれません。

SELECTED BY KWANGAKU SPORTS

KG ATHLETICS

2026年度の関学体育会も各部が全力をつくし、数々の熱戦を繰り広げました。
その中でもひとときわ輝いた9部の戦績をご紹介します。

合気道部



#男女連覇で創部史上初の快挙達成

6月7日、第46回関西学生合気道競技大会にて、男女ともに乱取り競技団体戦連覇を成し遂げる。創部史上初となる快挙を成し遂げ、新たな歴史を築いた。

卓球部 男子



#春季リーグにて無敗で関西制覇

5月2～10日、令和8年度関西学生卓球春季リーグ戦にて、3年ぶりに優勝を果たす。勝ち点を落とすことなく圧巻の強さを見せつけ、見事秋春連覇を達成した。

バスケットボール部 男子



#新星たちが時代を切り拓いた

5月16～24日、第4回全日本大学バスケットボール新人戦関西予選にて接戦を制し、見事3位入賞を果たす。ルーキーたちが躍動し、悲願の全国大会への切符をつかんだ。

バドミントン部 女子



#昨年に続き、女子団体は3位入賞

4月25日～5月10日、令和8年度関西学生バドミントン春季リーグ戦にて、女子団体が見事3位入賞を果たす。一人一人が躍動し、全員で勝利をつかみ取った。

バレーボール部 女子



#チーム一丸となり準優勝を果たす

4月11日～5月17日、RIGAVIL CUP 2026 関西大学バレーボール連盟女子春季リーグ戦にて、7勝4敗で創部初となる準優勝に輝いた。これからの飛躍に目が離せない。

フェンシング部



#春季リーグで女子エペが3位入賞

5月16、17日、令和8年度関西学生フェンシングリーグ戦にて、女子エペが3位に入賞。拮抗(きっこう)する試合展開の中、チーム一丸となり戦い見事表彰台を手にした。

ラクロス部 男子



#3年ぶりに春の王者奪還

6月7日、プレシーズンマッチにて、6-5で法大に逆転勝利を収める。3年ぶりに春の日本一に君臨。「SURGE」をスローガンに掲げ、チーム一丸となり戦い抜いた。

陸上競技部



#決勝レースで確かな実力を証明

6月19～21日、秩父宮賜杯第79回西日本学生陸上競技対校選手権大会にて、男子4×400m Rに出場。関西学生記録を大きく更新し、見事優勝を果たした。

洋弓部 女子



#悲願のベスト4入りを果たす

6月13、14日、第61回全日本学生アーチェリー女子王座決定戦にて、強豪校を倒し、悲願のベスト4入りを果たす。掲げていた目標を超え、歴史に名を刻んだ。

関学体育会のすべてはこちらから

ホームページ

関学体育会の試合速報を通し、母校の「今」をご覧ください。また、過去の試合結果や主将のコメントや、企画インタビューなど、数多くのコンテンツをご用意しております。また、定期購読の詳細も掲載しておりますので、ぜひご一読ください。



ホームページ

SNSアカウント

関学スポーツは、リアルタイムでの試合速報や、選手の号外ピラなど、様々な情報を SNS に発信しています。ぜひフォロー＆チェックのほど、よろしくお願いいたします！



Instagram



X (旧 Twitter)

関学スポーツとは

私たち体育会学生本部編集部は体育会の広報機関です。体育会42部50パートの試合に出向き、取材を敢行。紙面やSNSアカウント、公式サイト等にて幅広く広報を行っています。関学スポーツは1961年(昭和36年)4月に創刊され、発刊号数は2026年6月で287号を数えます(途中休刊あり)。